

デューイ教育哲学の形成と原理 (5)

—— キリスト教と倫理学 ——

小 柳 正 司

(1992年10月15日 受理)

The Early Developments of John Dewey's Philosophy of Education and Its Underlying Principles (5)

—— Dewey's Interpretations about Christian Ideas During His Michigan Years ——

Masashi KOYANAGI

はじめに

デューイは、1887年の「倫理学と自然科学」をかわきりに、倫理学の研究に取り組むことになった。そこでの彼の基本的な問題意識は、科学と道德、あるいは科学と宗教を統一する新しい哲学的立場を確定するということであった。それは、いわば初期デューイの思想形成そのものを導いてきた根本的な問題意識であったと言ってよい。

そもそもデューイの哲学への関心は、彼自身の晩年の回想によれば、大学3年生のときトマス・ハクスレーの『生理学初歩』を通じて「相互依存と相互連関的統一の意識」というものに目覚めたときに始まった。言い換えれば、それは一種の有機的世界観に基づいた「統合への欲求」というものであった。当時彼は、ニューイングランドのピューリタニズムがもたらす「分かち切り離す意識」によって「内面の裂傷」を負っていた。それは「重苦しい個人的危機の源泉」であったと彼は述べている。¹⁾ デューイにとってピューリタニズムは、もはや自己の生活に知的確信と展望を与えてくれる教義の体系ではありえなかった。産業化と都市化の波が押し寄せ、古い共同体的秩序と伝統的価値観が解体していく時代状況の中で、デューイは正統信仰の枠の外に広がる新時代の諸思想に次々と知的興味を示していった。²⁾ だが、因襲的な宗教的信念の拘束からはみ出そうとする彼の本能的な知的欲求は、それを「罪」として意識させ押しとどめる宗教的信念との間に「内面の葛藤」、内なる闘いを生じさせる。なぜなら、ピューリタニズムは、自然・欲求を神・理性から截然と区別し、後者をもって前者を裁き抑圧する意識の機制そのものであったからである。ピューリタニズムの伝統的教義がもはやデューイにとって自我を抑圧する精神的桎梏でしかないとすれば、そ

こからの自我の解放という彼の一身上の課題は、分裂した自我を再び全体として統合せしめるほどに包括的な価値の体系を探究するという知的課題と、常に二重写しの形で展開されていかざるをえなかった。それは同質的な地域的共同体 (local community) の解体と巨大な産業社会の出現という歴史の一大転換点において、かつての地域的共同体に代わるべき新たな社会秩序と、それを支える新たな精神統合の原理を求めていくということであった。³⁾

デューイは、大学を卒業した後、一時ハイスクールの教師をしていたことがある。そのおり彼は、ひとつの「神秘的体験」をしている。それは、「宇宙との一体感」の中で、それまで彼の内面に重くのしかかっていた「罪の意識」が「至高の喜びみに満ちた感情」によって一挙に解消されたという体験である。これによって彼は、超越的な絶体者だとか既成の道德律だとかいった外的規準によって自己の行動をいちいちチェックする必要はなくなり、自己の内なる神＝理性の働きに従って、心の赴くままに真理の探究を行えば、それでよいと納得することができた。⁴⁾ もちろん、このような「神秘的体験」あるいは「宇宙との一体感」が、その後のデューイの哲学研究の中身を直接決定づけたと見ることはできない。しかし、少なくともこの時点で、つまり本格的な哲学研究に取り組むことになる以前に、デューイは確かに、信仰と学問、宗教と科学の対立を自己の「内面の葛藤」の問題として引き受け、その解決を人間と神との一体性という方向に求めていたのである。それは、自然的世界と超自然的世界、物質と精神、人間と神とを画然と区別するニューイングランド・ピューリタニズムの二元論からの決別を意味するとともに、地上世界における人間理性の働き（科学）が、たとえ既成の宗教教義の枠をはみ出すことがあったとしても、それ自体は「神の意図」に反することではなく、むしろその有効な実現に向けた運動に他ならないことを確信するものであった。⁵⁾

以下では、ミシガン時代（1884～1894年）のデューイにおける宗教論関係の諸論文によりながら、彼の倫理学研究の前提となっているキリスト教解釈の文脈をたどってみることにする。

デューイのミシガン時代は、一般に前期と後期にわけられる。前期は彼がミシガン大学に着任した1884年からミネソタ大学に転任する1888年まで、後期は翌年に彼が再びミシガン大学に戻った1889年からシカゴ大学に転任する1894年までである。そして、前後10年間にわたるミシガン時代は、デューイのいわゆる実験主義 (experimentalism) あるいは道具主義 (instrumentalism) の哲学が形成される時期にあたり、彼の思想形成にとってきわめて重要な意味をもつ時期である。特に、彼がミネソタから戻った直後の1890年は彼の思想形成上の「臨界年」(a critical year) とされており、⁶⁾ この年を境に、デューイはそれまでのヘーゲル主義の「絶対的自己意識」の概念に依拠していた立場を放棄して、徐々にその概念を人間の具体的な「行為」(conduct) の機能主義的な分析の中に解消していくのである。

ところで、このミシガン大学時代のデューイは、倫理学研究を中心とする哲学理論の展開のかたわら、大学内の学生キリスト者協会 (Student Christian Society) の活動に積極的に関与し、その聖書クラスの講師を引き受けたり、日曜集会で講義をする中で、若い学生たちに向けて自分のキ

リスト教解釈を積極的に提示している。後にも先にも、デューイが自分のキリスト教解釈を公に論じているのはこのミシガン大学時代において他にない。残念ながら、そこで彼がどのようなキリスト教解釈を展開していたのか、その具体的な内容を知る文献はあまり多く残されていない。⁷⁾ だが、そこに示された彼のキリスト教解釈の内容をこの時期の彼の哲学理論（とりわけ倫理学理論）の展開と関連づけてみると、彼のヘーゲル主義の受容と離脱がどのような思想的文脈の中で行われていたのかがある程度理解される。そして、ヘーゲル主義の受容から離脱に至る彼の思想形成の過程が単なる理論上の脱皮として行われたのではなく、初期から彼が一貫して追究していた一つの理念の自己発展の過程として行われたものであることが理解されるのである。

1. 神の認識

デューイは、ミシガン大学に赴任して早々の1884年11月に学生キリスト者協会で「神を知ることの義務」と題する講義を行っている。ここで彼は、神を認識することは人間にとって最高の道徳的義務であり、神を認識できないのは知的欠陥ではなくて、神を認識しようとする「意志」の欠如によるものであり、従ってそれは道徳的欠陥であるという主張を展開している。だが、デューイによるこの主張は、単純な「神を信じなさい」式の説教でもなければ、超越的な人格神の支配を認める弁神論でもなかった。何よりもそれは、近代科学の発展がもたらした信仰上の懐疑論を克服する精神的拠り所を示そうとするものであった。

「多くの懐疑論者が言明するところによれば、彼らの最大の悲しみは、彼らが父なる神のいない孤独な世界に孤児として生きているということであり、父なる神を知ることができれば、彼らの最大の喜びとなるだろうということである。しかし、キリストと彼の真弟子たちは、はっきりとこう述べている。神を知ることができないというのは、知的欠陥ではなくて、道徳的欠陥である。」⁸⁾

こうした信仰上の懐疑論と孤独感は、何よりもデューイ自身が「内面の葛藤」という形で若いころに体験していたものに他ならない。それは「伝統的な宗教的信念と私 [デューイ] 自身がすなおに抱くことができる考え方との間の葛藤」として「重苦しい個人的危機の源泉」をなしていたものである。⁹⁾

実際、南北戦争後のこの時代は、それまで道徳的真理の偉大な源泉であったキリスト教信仰が根底から崩壊していった時代であった。特に、種の変異を純然たる自然史の過程として説明したダーウィンの進化学説は、神の創造説を否定し、森羅万象に対する神の意志の干渉という観念を根本から排除することによって、啓示宗教の信仰原理に決定的な打撃を加えたのであった。さらに、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の社会進化論は、人間の行為に対して道徳的な善悪の判断を下すものは、もはや神による人間魂の救済計画などではなくて、適者生存という冷厳な社会進化の「法則」であることを、科学の名において宣言したのであった。そして、人間の社会生活や歴

史に関しても、神抜きに、諸事実相互の因果連関から客観的に説明する新しい歴史学や社会学が、科学的な学問としての市民権を獲得しつつあった。人間の内面の精神作用でさえも、生理学と実験心理学の登場によって、神が人間魂に授ける霊力など全く顧慮することなく、物質現象の一部として、実験室で客観的に研究できる対象とされるようになった。

このように進化論と諸科学の発展によって伝統的な宗教的教義が解体されていくことは、一面では人間理性の解放・自立を意味するとともに、他面ではキリスト教信仰に代わる新たな精神的拠り所を人間理性が神に依拠することなく自力で提供することができるのかという問題を引き起こす。デューイが「神を知ることの義務」を主張するのは、一見矛盾しているようではあるが、その問題に肯定的に答えるためであって、けっして科学を否定したり、人間理性を再び超越的な神の支配に従属させたりするためではないのである。科学の発展が懐疑論を招来し、人々の間に価値喪失状態を生み出したとすれば、それは科学そのものというより科学についての人々の理解の仕方が間違っているからだと言えよう。

「現代の見解〔懐疑論〕は、知識の起源と本性についての間違った理論から生じている。われわれは、知識を意志から分離している。われわれは、真理を義務から孤立させている。われわれは、あらゆる知られる事実はわれわれ自身について何かを要求するものだということを忘れてしている。われわれは、われわれの願望、興味、目的意識、要するにわれわれの道徳的本性の傾向全体がそれに関係する場合以外には、知識は生じないということを忘れてしている。」¹⁰⁾

これは一つの認識論批判に他ならない。そして、デューイは、懐疑論の克服、すなわちこれまで主として宗教が担ってきた道徳的な価値の世界の回復を、科学の否定によってではなく、科学の前進のうちに示された人間理性そのもの、その「正しい」理解のうちに見通すのである。

デューイによれば、認識とは単に知るか知らないかといった「無色の知的事柄」ではなくて、何かを知ろうとする「意志」の発現であり、それは「本質的に道徳的事柄」なのである。

「われわれの興味が生じ事象に対して活気づいており、われわれの意志が能動的に、望まれている目的へと方向づけられている時以外、何ものについても知識は存在しない。われわれは、われわれが最も知りたいと思うものをのみを知るのである。知るか知らないかということは、人間の道徳的本性を少しも含まない無色の知的事柄ではない。それは本質的に道徳的事柄である。われわれは見出すために探さなければならず、われわれが探しているものを見つけるのである。」¹¹⁾

言い換えれば、認識は人間が世界と関わる時の、人間の世界に対する能動的な構えを現しているということであり、その意味で、認識は「無色の知的事柄」ではなくて、人間が世界に対してどのような態度で関わろうとするのか、その「道徳的本性」が鋭く問われる問題なのである。つまり、認識もそれ自体一つの道徳的な行為と考えられるべきだというわけである。

しかるに、デューイによれば、今日、多くの科学者は自然と歴史に関するきわめて微細な事実の研究に没頭し、そこでは知識の蓄積が何かそれ自体で目的であるかのように考えられ、事実の探究

と発見がもつべき本来的な道徳的意味については少しも顧みられていない。だが、そのような「純粹に知的な営み」は不健全で一面的であり、微細な事実の単なる積み上げは本当の意味での認識ではない、とデューイは言う。

「単なる諸事実は、それらが人間の本性全体、あるいは人間の社会的、道徳的な諸活動と関係づけられるようになるまでは、知識とはならない。」¹²⁾

本当の意味での認識とは、単なる事実の探究と発見に終始することではなく、そうしたことを越えて、何よりも人間の道徳的真理の把握、つまり人間の社会的、道徳的な諸活動を導く確固とした「真理」の把握に立ち向かい、そうした「真理」を把握しようとする人間の「意志」によって動機づけられ支えられた諸事実の探究と発見でなければならないのである。言い換えれば、事実についてのあるゆる認識は、その中に人間の道徳的真理の把握へと通ずる契機を必ず含んでいなければならないということであり、単なる事実の蒐集だけでは何の意味もないということである。

「自然と歴史の全世界は、人間の本性と諸活動に関係づけられないかぎり、無価値である。そして、科学と哲学は、人間の生きた活動および人間の全ての努力の最終目的へとあらゆる事実を究極的に関係づけるものでなければ、無価値である。」¹³⁾

そして、デューイは、そうした人間のあらゆる生きた活動を導く究極的な「真理」（道徳的真理）をここであらためて「神」と呼んでいる。だが、この「神」はもはや啓示宗教の超越的な人格神ではない。なぜなら、人間の活動を導く究極的な「真理」は、もはや超越的な神から啓示によって人間に与えられるものではなく、人間が自らの理性の力によって、人間と世界との関わりの中に、つまり自然と歴史の諸事実のうちに、人間が自ら発見するものだからである。神は、人間の現実世界のはるか彼岸にたつ超越的な至高の存在ではなく、人間と世界との関わりの中に内在する「真理」そのものである。それゆえ、彼が主張する「神を認識する義務」とは、そうした「真理」としての神を、まさにこの此岸の現実世界の中に発見する義務であり、科学を含む人間のあらゆる認識活動は、そうした義務の自覚的な遂行として、地上のあらゆる諸事実の中に「真理」としての「神」を見出すことでなければならないのである。

「全ての知識は一つである。それは、全て神についての知識であり、神というよりむしろ宇宙についての知識である。そして、もし一組の諸事実が神および神の被造物との全ての関係から切り離されて、それら自身であるものと見なされるならば、それは知識ではない。」「もし人間の願望と意志が神に向けられているならば、彼は彼の全ての知識の中に神を見つけるであろう。……神は常にわれわれの周囲にある。そして、神を知ることができないということは、われわれが神を知ろうと望んでいないということを示している。」¹⁴⁾

こうしてデューイは、神を此岸の現実世界の中に引き降ろし、神を人間理性の認識の対象としたのである。「神は常にわれわれの周囲にある。」これは、彼がかつてハイスクール教師時代に孤独な読書生活の中で体験したあの汎神論的な「宇宙との一体感」に通じる神概念であるだろう。だが、ここでは「宇宙との一体感」は、もはや単なる神秘的な感情体験ではなく、人間と世界との現実的

な関わりのうちに内在する「真理」として、「神」の存在を自然と歴史に関するあらゆる諸事実の中に発見することによって理性的に達成されるものとなっている。

2. 認識と宗教感情

以上のように、デューイは、神を人間の現実世界のうちに内在する「真理」と見なし、神を人間理性による認識の対象に据えたのである。言い換えれば、神は「真理」として、科学を含む人間のあらゆる認識活動がそこへと向かっていく究極の認識対象だということである。だが、そのような「真理」としての神の認識は、人々が単に表面的な諸事実や諸現象の認識に満足して、そこにとどまっているかぎり、成し遂げることができないものとデューイは言う。なぜなら、神＝「真理」の認識は、単なる事実認識や現象知ではなく、それらを越えて、まさに諸事実、諸現象の中に神＝「真理」を発見することだからである。もし神が彼岸にたつ絶対者だとすれば、人間は永遠に神に到達することはできず、それは単なる信仰の対象にとどまる。それは、一方における永遠の真理の世界と、他方における人間の現実世界との分割、前者による後者の支配という二世界論を生じさせる。だが、神は人間の現実世界に内在する「真理」であり、認識可能な対象である。そして、科学を含む人間のあらゆる認識活動は、地上の諸事実、諸現象の中に神＝「真理」を発見することを通して、分裂した二つの世界を媒介し、神を人間の手に取り戻し、最終的に人間が神と一体化する、そのための過程なのである。このように、デューイは人間の認識活動に道徳的な意味を含ませる。だから、科学を含む人間の認識活動を単なる事実認識や現象知に限定しようとするあらゆる試みは、神を人間の認識の対象から除外することによって、再び神を人間の現実世界から隔絶し、人間と神との一体化、人間自身による「真理」の把握を不可能にしてしまうとデューイは見なす。そこに、先に見た彼の認識論批判の意味がある。つまり、科学の発展が懐疑論を生み出しているとするれば、それは「知識の起源と本性についての間違った理論から生じている」ということになるのである。

デューイは、先に考察した学生キリスト者協会での講義「神を知ることの義務」の翌年（1885年）に、スコットランド人の巡回説教師ジョージ・マクドナルド（Jeorge Macdonald）の著作からの抜粋を編集して出版しているが、¹⁵⁾ その中の一節には、次のような記述がある。

「これは科学的と自ら称する全ての議論と直喩および教義との私の闘いである。それらは、まさに魂が貧弱なので、腕をどんなに広げても、神そのものを捉えられないでいる。そして、それらは神の周囲にモヤと嵐を生じさせ、その結果、父なる神が腕を天空と同じくらい広く広げて地上の疲れ果てた子供を抱こうとしているにもかかわらず、哀れな子供は父そのものを見ることができない。」¹⁶⁾

マクドナルドの文章は黙示録的であるけれど、そこには、神と人間との一体化を求めるこの時代のデューイのキリスト教理解と、皮相な科学的議論（と彼が受けとめたもの）に対する彼の批判的態度とが、映し出されている。

デューイにとって、認識とは単に対象を写し取るのではなく、世界に立ち向かう人間自身の能動的な構えの現れであり、自ら対象を捉えようとする人間の「意志」の発現なのである。だから、科学を含む人間の全ての認識活動は、無色透明の事柄ではなくて、人間が世界に対してどのような態度で立ち向かおうとするのか、そうした人間自身の世界に対する構えに発する意志的行為であり、人間と世界との関わり方についての人間自身の問いかけに答えようとするものなのである。つまり、人間の認識活動は、此岸の現実世界のうちに、人間の生きた活動を導く「真理」を発見しようとする人間自身の意志的行為だということである。そして、デューイは、この此岸の現実世界のうちに見出される「真理」を神と見なすのであるから、人間の認識活動は、此岸の現実世界のうちに神を捉え神と一体化しようとする人間の意志の発現に他ならないということになる。かくしてデューイは、科学を含む人間のあらゆる認識活動は、神へと上昇しようとする「宗教的感情」に満たされた「実践的なキリスト者生活」そのものと同じであると見なすのである。

デューイは、1886年に学生キリスト者協会で「宗教的情動の位置」と題する講義を行った。この中で彼は、「私は情動の正しい行為以外に、実践的なキリスト者生活において重要なものを他に知らない」と述べ、宗教的情動は単に個人の内面の感情状態に向けてそれが正しいものかどうかあれこれ探りを入れられると、自我を暗い内面の世界に閉じ込めてしまうことになることになると批判し、真の宗教的情動は「われわれの生命を一つの完全な生命の中に没入させること」、つまり神と一体化しようとするわれわれの意志から発するものだと主張した。そして、このような「神の完全で生きた意志に対する崇敬」、すなわち神へと上昇しようとするわれわれの意志は、自我を暗い内面の世界から解き放ち、外の世界に向かってわれわれに献身的な活動を鼓舞すると述べている。

「敬愛すべきもの、名高いものに対する自発的で能動的な興味というものがなければ、心からの献身、熱意ある奉仕など全くありえない。宗教的情動が外に向かって不断に新たになること、それはわれわれを怠惰な無気力、物憂げな夢想、空虚で無目的な生活といったものから目覚めさせる唯一の起動力である。そのみが、われわれを単調な骨折り仕事の繰り返しから呼び起こして、神の王国の喜びへと導いていくのである。……情動から供給される興味がなければ、人々は眠り夢見るだけで、けっして目覚めて行動することはないであろう。感情は、それ自身で善いものではなく、それが人々を奮起させ、熱望を呼びさまし、献身をたきつけ、奉仕へと導くからこそ、善いものなのである。」¹⁷⁾

「宗教の本質は、神聖な意志へのわれわれの意志の慎ましい自己投入である。……健全な情動は、高い召命（high calling）の素晴らしく貴重な働きへと突き進むことに自ら没入する。それは、自らを行動の中で消費する情動であり、新たな努力への動因を与える情動である。」¹⁸⁾

要するに、宗教的情動とは、神を志向し、神と一体化しようとする人間の意志の働きなのであって、そのような自覚的な意志の働きに支えられて、人間が自らの行動を目的意識的に律していくところに、デューイは「実践的なキリスト者生活」の姿を見るのである。彼にとって宗教とは、単なる信仰の問題でもなければ、内面の感情生活でもなくて、何よりも人間の実践の問題なのである。

すなわち、此岸の現実世界の中に人間自らが神の意志を見出し、それへの自己投入によって、此岸の現実世界の中に神の意志を実現しようとする、そういう人間の目的意識的な実践が、彼の言う正しい宗教的情動に導かれたキリスト者生活に他ならない。そして、科学を含む人間のあらゆる認識活動が、神を認識することの義務を自覚して、此岸の現実世界のうちに内在する神の把握に向かうとき、科学と宗教との間に基本的な対立はなくなるとデューイは考えるのである。

3. 科学と宗教と民主主義——ミシガン後期のキリスト教解釈

以上のように、ミシガン前期のデューイにとって、宗教と科学の調停という課題こそは、彼の思想的営為を通底する中心的な課題であったといえることができる。そして、彼がヘーゲル主義哲学に魅力を感じ、それを受容するに至ったのも、まさにそれが、現代科学の諸成果とキリスト教信仰の双方を矛盾なく説明する一つの包括的な哲学を提供していると思われたからである。

だが、このミシガン前期の諸論文において、デューイはいまだ「神」という言葉に実体的な意味を込めて使用している。もちろん、彼の言う「神」は、当初から、超越的な存在としての人格神を意味するものではなかった。それは、物質現象の中に内在し、物質現象を相互に関係づけている精神的原理であり、宇宙を静止した諸要素の単なる集合体ではなく、活動する一個の生命体と見立てたときに、個々の物質現象を貫いて持続し自己展開していく統一的な意志として存在するものであった。デューイはそれを、ヘーゲルにならって「宇宙の自己意識」とか「絶対的精神」と呼んでいるが、とにかくそうした「絶対的精神」＝「神」は、地上の現実世界との一切の接触を断った超越的な存在として、それ自体で存在するものではなく、地上の現実世界を自らの意志を実現していく手段として、あるいは自らの外皮（現象形態）として、その中に自らを部分的に顕現するのである。だから、「絶対的精神」すなわち「神」の意志は、人間に認識可能な対象である。そして、人間は科学を含むあらゆる認識活動を通じて、自らこの「神」の意志を地上の現実世界のうちに発見し、人間自らの実践的活動を通じてこの「神」の意志を地上の現実世界のうちに実現していく、そこに人間が果たすべき道徳的使命があるのだとデューイは言うのである。こうして、彼は科学と宗教、科学と道徳の間を架橋する。

しかしながら、ここでは「神」の意志にせよ宇宙の「絶対精神」にせよ、それは観念論的に措定された一個の理念的所与にすぎない。つまり、宇宙を一個の有機的な生命体と見なしたうえで、そこには個々の物質現象を貫いて自らを実現していく普遍的意志というものがあるはずだという一つの想定にすぎないのである。それゆえ、科学と宗教あるいは科学と道徳の間の架橋も、ヘーゲル的な観念論哲学の枠組の中での単なる説明原理として解決されるにとどまっている。ここでは、デューイの問題関心は、経験的諸事実を観念論哲学の枠組を用いることによって有神論の方向にいかにかうまく説明することができるか、そうした解釈の問題に集中している。

これに対して、ミシガン後期になると、デューイの問題関心は徐々に、観念論哲学の枠組をはみ

出して、単なる解釈の問題から実践の問題へと移行していく。ここでは、「絶対的精神」とか「普遍的自己意識」とかは、「神」に置き換え可能な理念的所与として、人々の行為に先立ってあるものではなくて、具体的な行為の発現とともに、そのつど行為の中に顕現し、一つ一つの行為の発現を貫いてそこに持続する意志の作用と見なされる。つまり、理念的所与としての「絶対的精神」の概念は放棄され、「絶対的精神」がもっていた理念的契機は人々の具体的な行為の生成過程の中に引き降ろされるのである。それゆえ、科学と宗教あるいは科学と道德の間の調停という課題も、ここでは経験的諸事実を有神論の方向にいかにもく説明するかという経験的諸事実の解釈によって果されるのではなく、宗教と道德という人間の価値に関わる行為をも、経験的諸事実の一部として説明することによって果されるのである。

1892年3月、デューイは「キリスト教と民主主義」と題する講演を学生キリスト者協会が主催する日曜集会で行った。この講演で、デューイは、既製の制度化したキリスト教に対する自らの決別を明確にするとともに、キリスト教教義の本質（と彼が考えるもの）を制度化したキリスト教とは区別して、本来のキリスト教精神を現実の社会生活の生きた実践の中で実現することを求めた。

さて、この講演においてデューイはいくつかの注目すべきキリスト教解釈を示している。まず第一に、そもそも宗教とは「共同体の社会的諸関係の表現」であるとデューイは述べている。

「宗教の起源と発展に関する研究は、……あらゆる宗教はその起源を共同体または種族の社会のおよび知的生活にもっていることを示している。あらゆる宗教は、共同体の社会的諸関係の表現である。その儀式、祭式はこれらの諸関係の神聖な意義の認識である。宗教は、人々の精神的な態度と習慣の表現である。それは、人々が自らの所属する世界に対して示す美的および科学的な反応である。その観念、ドグマ、神秘は周囲の事物の社会的および知的価値を、シンボリックな形式で、詩の形で認識したものである。」¹⁹⁾

これは、当時勃興しつつあった民族学や人類学、あるいは宗教社会学などの見解を踏まえたものであるが、とにかくここでデューイが宗教を人間の社会生活の一部として相対化して捉える見方を受け入れていることは明らかである。すなわち、宗教はもともと、人々が共同体の社会生活を自ら統制するために、社会的諸関係について人々が獲得した知的な洞察や認識を、一定の教義体系やシンボリックな祭式へとまとめあげたものだというわけである。だが、社会的諸関係についての人々の洞察や認識が、一旦宗教という形で制度化され固定化されると、それ以後宗教は次第に共同体の社会生活に対する生きた関係から切り離されてしまい、特定の遂行されるべき行為や特殊な観念の集合と化し、宗教は腐敗する。

第二に、こうした観点から、デューイは「キリスト教は宗教ではなく啓示（revelation）である」とするキリスト教解釈を示している。宗教の起源がもともと共同体の社会生活を統制するための社会的関係についての知的洞察や認識にあったとすれば、大事なことは、宗教というラベルを貼られた特定の教義や行動様式を保持することではなくて、そうした社会的諸関係についての洞察や認識を不断に見出し続けることである。そして、キリスト教は、あれこれの教義や祭式それ自体に

価値を置くものではなく、「神は真理であり、真理として神は自らを余すところなく完全に人間に示す」と主張することによって、共同体の社会生活を律する「真理」そのものを第一義とし、人々に「真理」の把握と「真理によって生きること」を教えるものであった。こうした意味で、キリスト教は宗教ではなく啓示であるとデューイは言うのである。

「キリスト教は、もし普遍的であり、もし啓示であるとするならば、生活の意味の発見をけっして止めることなく、不断に展開していかななくてはならない。啓示は生活の確証 (ascertaining) である。これはそれ以上のものではありえない。これが全てでなければならない。」²⁰⁾

「キリスト教は啓示であり、啓示は人間の生活と宇宙の實在についての真理の、人間に対する効果的な発見、現実的な確証または保証である。」²¹⁾

ここでもデューイは、ミシガン前期同様、「神」という言葉を使用し、それを超越的な人格神ではなく、人間の現実世界に内在する「真理」、つまり上記引用文にある「人間の生活と宇宙の實在についての真理」としている。だが、ここではキリスト教を宗教ではなく啓示とすることによって、デューイは「神」＝「真理」を既成宗教としてのキリスト教の文脈から完全に救い出し、宗教を「社会的諸関係の表現」とすることで、「神」＝「真理」を人間共同体の社会的文脈の中に移し入れている。

その上で、第三にデューイは、こうした真理の啓示というキリスト教本来の原理は、いまや既成宗教としてのキリスト教、つまり「教会と呼ばれる歴史的組織」によってではなく、その外側で科学によって遂行されるようになったと述べている。真理の啓示は、真理を一回限りで固定し、これが真理だと宣告することではなくて、「生命が新しい意味を展開し、新しい行動を提起している限り、持続していかなければならない」ものである。²²⁾ 確かに、キリスト教は、神は一つでありそれは「真理」であると主張する。だが、キリスト教が主張する唯一の絶対的真理は、一回限りで固定された特定の真理を意味するものではない。それは真理一般 (Truth) を意味している。つまり、キリスト教はこれこれが真理であるというふうに真理の内容を特定化して提示するものではなくて、ただ真理というものがあり、それは人間に啓示される、つまり人間は真理を知り得ると主張するのである。

「イエスが宗教的なものとして知っていた唯一の真理は、真理一般であった。彼が教えるようになった特殊な宗教的真理などはなかった。反対に、彼の教義は、人間によっていかに名付けられ、いかに分割されようとも、真理は神が一つだというものであった。真理を把握し、それによって生きることが宗教である。」²³⁾

真理は、それが内容的に固定化されれば、真理ではなくなり、ドグマとなる。真理は、まさに真理一般として、不断に求め続けられるものである。その意味で、キリスト教は宗教ではなく啓示であり、つまりは真理の探究・発見と同義となる。だから、デューイは「キリスト教においては、宗教的真理を一度限りで固定し、それを特定の厳格な制限内に保持し、まさにこれがキリスト教であると言うことは、自己矛盾である」と述べる。²⁴⁾ だが、実際には、数世紀の間、「教会と呼ばれる

歴史的組織」が自らを真理の保護者であり管理者であると主張し、真理の固定化と独占を図ってきた。その結果、真理の啓示、つまり真理を真理一般として不断に求め続けるというキリスト教本来の精神は、制度化したキリスト教から離れ、そのより適切な表現手段として、新たに科学という「より広く、より自由なチャンネル」において進行することになったとデューイは言う。

「真のキリスト教は、今や組織の外で、組織を越えて働いており、啓示はより広く、より自由なチャンネルにおいて進行している。」「啓示は、われわれが科学と呼ぶものにおいて為された。啓示は、教会の不信仰のために妨害されることはなかった。それは新しいチャンネルにおいて進行した。」²⁵⁾

もちろん、ここでデューイが言う科学は、個別専門的な科学を言うのではなく、真理探究の方法という広く一般的な意味での科学を言っているのである。こうして、デューイは、キリスト教は啓示であり、啓示としてのキリスト教本来の意義は、今や科学によって実現されるようになったと見なすことで、宗教と科学を調停する。だが、同じく宗教と科学の調停といっても、ミシガン前期と後期とでは宗教と科学の関係は主従が逆転している。ミシガン前期では、宗教が主であり、科学は神が世界に内在することを経験的諸事実を通して論証することに、その意義が認められていた。これに対して、ミシガン後期では、科学は世界に内在する神を人間に啓示する唯一正統なチャンネルとして全面的信頼を寄せられ、キリスト教の存在意義を真理の啓示という一点に絞り込むキリスト教解釈によって、現実の科学の発展がそれ自体として積極的に是認されている。そして、ミシガン前期と後期における宗教と科学の関係のこの逆転が、デューイ個人において大した断絶もなくおこなわれているのは、もともと彼が神を世界に内在する真理と見なし、この真理としての神は人間に認識可能な対象だとする立場をとってきたからである。

第四に、デューイは「人間は宇宙の絶対的真理の器官（organ）である」と述べている。²⁶⁾ 既に見たように、デューイはキリスト教の本質を、神は真理であり、真理としての神は自らを人間に啓示するという点に見出している。だが、デューイによれば、啓示は超越的な神が自らの真理を何か特定の教義という形で人間に教示するといったものではない。ここでデューイは明らかに、伝統的な啓示宗教の啓示概念を否定している。むしろ、彼によれば、啓示はそれが真に啓示であるためには、真理が啓示される当の人間が自らの力によってその真理を把握し、それを自らの意識へともたすことができなければならないのである。つまり、真理の啓示は、外からの真理の授与ではなく、人間自身による真理の探究と発見でなければならないのである。そして、デューイは、このように人間が自らの力で真理にアプローチし、真理を把握する行為こそが科学であると見なすのである。

「啓示は、外在的な神が神自身と神の御業の方法について、人間に特定の固定化された陳述を言明するところのプロセスであるとする教義は、誤りである。神は本質的にはただ自己啓示するだけである。そして、啓示は人々が神を認識するようになるときにのみ、完全となる。」²⁷⁾

ここでデューイが「神はただ自己啓示するだけである」と言っているのは、神はちょうど物理的現象の背後に客観的に存在する法則のように、現実世界のあるがままの諸事実のうちに、それら諸事

実をそうあらしめている内在的な真理として、ただそこにあるということであり、神はけっして自らこれこれが真理であるとは言明しないということである。だから、真理の啓示は、人間が自らの力で現実世界のうちに内在する真理を発見し、それを自己の生活の中に生かすということに他ならない。それゆえ、デューイは「啓示は知性においてのみあり、また知性においてのみありうる。…啓示としてのキリスト教は、人間の思考と理性に対してのみならず、人間の思考と理性においてある」と述べるのである。²⁸⁾つまり、神の真理の啓示は、結局のところ、人間の認識の問題に他ならず、そして、人間が現実世界に内在する真理を自ら認識しうることは、現実の科学の発展によって示されているというわけである。

しかしながら、デューイはさらに、「真理をわがものとする全ての手段を越えて、真理把握の全ての器官を越えて、人間自身の活動がある」と述べている。²⁹⁾啓示は人間の「知性」「思考と理性」に関わるものであり、人間自身による認識の問題である。しかし、そうした認識に先立って、何よりもまず「人間自身の活動」があるとデューイは言う。なぜならば、人間の認識は、現実世界における人間自身の活動の中から生じ、それに戻っていくものであり、「人間は、彼が生きている宇宙を特定の時点での彼自身の活動の観点から解釈する」からである。³⁰⁾

「たとえイエス・キリストが生活の全ての事実に関する絶対的で詳細で明確な陳述をなしたとしても、彼の言明した陳述を人々が彼ら自身の活動において実現しはじめるまでは、つまり彼ら自身がその陳述を生きはじめるまでは、その陳述は意味をもたなかったであろうし、それは啓示とはならなかったであろう。要するに、人間自身の活動、人間自身の生活運動こそは、彼が真理を受け取り、真理をわがものとするための唯一の器官なのである。」³¹⁾

神の真理は、地上の現実世界のうちに内在し、諸事物の根底にあって、諸事実をかくあらしめている生きた法則であり、そのようなものとしてただそこにあるにすぎない。そして、この神の真理は、何か特定の固定化された教義として、これが真理だという形で人間に外側から与えられるというものではない。神の真理は、地上の現実世界における人間の実際生活の活動を通して、その中で人間自身によって認識され、発見されるものである。それゆえに、人間の活動、人間の生活そのものは、現実世界のうちに内在する神の真理が、単なる内在的な真理ではなく、生きた現実の真理となるための媒体であり、器官なのである。すなわち、人間は「普遍的真理の器官」であり、神は人間のうちに「化身」(incarnate)する、つまり神の真理は人間の生きた活動を通して認識され、現実世界のうちに実現されるというわけである。

第五に、デューイは、真理の啓示というキリスト教の精神は、民主主義においてはじめて現実的な力をもつと述べている。上で見たように、世界に内在する神の真理は人間の生きた活動を通して認識される。だが、この真理の発見(啓示)は、個々の人間の孤独な作業として行われるのではなく、社会的諸関係を通じての人々の共同作業として行われるとデューイは言う。なぜなら「人間の活動は彼の社会的諸関係、すなわち彼が彼の仲間の人々と結び付く仕方のうちに見出される」³²⁾からである。そして、デューイは「生活の真理を認識することを通して仲間の人々との統一に向かう

人間のますます完全な運動」³³⁾を「民主主義」と呼んでいる。つまり、デューイにとって民主主義とは、世界に内在する真理の発見を通じての「人類の精神的統一化」を意味している。それゆえ、彼は「民主主義は精神的事実であって、単なる政治的統治機構ではない」³⁴⁾と述べている。

世界に内在する神の真理は、人間の活動を媒体にして、人間に認識される。そして、人間の活動それ自体は、人々の中の社会的諸関係を通じて、その中で行われるものである。そうだとすれば、ここでデューイが民主主義は真理の発見を通しての人々の精神的統一であると言っていることは、人々が自分たちの活動を規定している社会的諸関係の根源的な力（「生活の真理」）を彼ら自身の生活活動を媒体にして捉え、そのようにして捉えられる「生活の真理」の確実な認識によって一個の精神的統一体としての共同社会を自覚的に達成するということを意味しているであろう。そして、先に見たように、デューイは神を超越的な絶対者ではなく、地上の現実世界に内在する真理と見なし、宗教は「社会的諸関係の表現」とまで言っていたのであるから、彼の言う神＝真理とは、結局のところ、人々の社会的諸関係の根底にあって、人々を一つの社会的組織へと有機的に結合している精神的原理のようなもの意味しているであろう。実際、彼は次のように述べている。

「人々を結び合わせている紐帯、社会を統一している諸力が、神の諸法則以外のものであるとか、生活における神の働き以外のものであるとかという想定は、世界における神の存在に対する事実上の不信仰の一部である。」³⁵⁾

だが、このように社会的世界の根底にある精神原理を神と想定することと、神の啓示は科学において為されるという先に見たデューイの主張とは、どう関係するのだろうか。デューイは、制度化したキリスト教の外側で科学の発展が明らかにしたことは、社会的世界に対比される意味での物理的世界について、「法則の統一のより深い真理」「一個の不断の生きた力の存在」「全世界の共同的で活気のある統一」を示したことであったと言っている。³⁶⁾そして、このことを指してデューイは、神の啓示は科学において為されてきたと言っている。つまり、科学は物理的世界について、諸現象の背後にそれらを有機的に統一する法則が真理として存在することを明らかにしたということであり、これは神の内在とその人間による認識可能性とを説くキリスト教本来の啓示の精神が科学によって現実的な意味をもつようになったことを示しているというわけである。それゆえ、人間の社会的世界についても、人々の社会的諸関係の背後にそれらを有機的に統一する法則が神の真理として存在することを、人間は今や科学の力、つまり人間自身の認識能力によって明らかにできるはずであり、そうしないのは「神の存在に対する不信仰の一部」つまり一種の社会的不可知論であるとデューイは言うのである。

このようにデューイが民主主義ということによって求めているものは、キリストが「神の王国」と呼んだものを地上の社会的世界のうちに実現すること、つまり「人類の精神的統一」(the spiritual unification of humanity)「人間の兄弟愛」(the brotherhood of man)を実現することである。そして彼は、地上の「神の王国」は「真理の共同体」あるいは「一個の真理のコモンウェルス」として実現されると述べている。それは、社会的世界の根底に内在する神の真理、すなわち人々の社会的諸関

係の背後にあって人々を一個の社会的組織へと統合している「生活の真理」を、人々が自らの社会生活（活動）を通して把握し、そうした真理の把握によって、人々が一個の精神的統一のうちにもたらされるということである。

「もし宇宙に神がなく、法則がなく、真理がないならば、あるいは、もしこの神が現実働いている神ではなく不在の神であるならば、どんな社会組織も精神的意味をもつことはない。もし神が、キリストが教えたように、生活の根底にあり、人間のうちに化身しているとするならば、民主主義は精神的意味をもち、それを逃さないことがわれわれの義務となる。」³⁷⁾

それと同時に、「真理の共同体」としての民主主義は「真理の自由化」(the freeing of truth)をも意味するとデューイは言う。真理は、人々の社会的諸関係の中で、人々の活動を通して認識され捉えられるものであるから、人々が真理の把握を通じて結び付き、一個の精神的統一体（「真理の共同体」）を実現するためには、真理はあらゆる機会にあらゆる人に対して接近可能なものでなければならない。それゆえに、デューイは「民主主義の組織の成長が真理を拡散するための電信や蒸気の機械装置を含む科学の勃興と軌をいつにしているのは偶然ではない」³⁸⁾と述べ、民主主義は「真理を閉じ込め抑圧していた人々の孤立状態や階級利害の壁を破壊すること」³⁹⁾を意味していると言う。

「もし神が、キリスト教が教えたように、生活の根底にあり、人間のうちに化身しているのであるならば、民主主義は精神的意味をもち、それを逃さないことがわれわれの義務となる。民主主義は自由である。もし真理が諸事物の根底にあるならば、自由は真理が自らを自由に示す機会を与えることを意味する。自由としての民主主義は、拘束の弛緩、諸制限の撤廃、障壁、中間の壁、間仕切の破壊を意味する。この制限の撤廃を通して人間生活の存するいかなる真理、いかなる現実性も、自らを自由に表現するように解放される。」「真理は、それがあつた個人の意識へと入って、彼が自らを喜ばせるときに、完全に自由となるのではない。それが自由となるは、真理がこの恵まれた個人において、この個人を通して、仲間の人々へと移されるときである。」⁴⁰⁾

以上、私は1892年3月に行われたデューイの講演「キリスト教と民主主義」に示された彼のキリスト教解釈を5点にわたって考察した。それらを要約すれば、キリスト教は本来、いかなる教義、いかなる特定の制度や行為をも設定せず、ただ真理そのものの把握と、真理によって生きること人々に求めるものであり、その意味でキリスト教は宗教ではなく啓示であるとデューイは言う。神は世界に内在する真理であり、そのような真理として、神は人間に対して不断に自らを啓示し続けていく。こうしたデューイのキリスト教解釈は、ほとんどヘーゲル流の絶対的精神の自己展開の概念に重なり合うものであろう。そして、デューイは、このようなキリスト教解釈をもって、神＝真理の啓示は今や科学によって為されるようになったと述べるのである。すなわち、科学は、少なくとも自然的世界に関しては、諸現象の背後に法則の統一というものが存在し、それは人間の知性によって認識可能であること、つまり人間は真理の媒体であり、世界のうちに内在する真理は人間に

において化身（incarnate）するということを示した。だから、科学は「教会という歴史的組織」に代わって、キリスト教の啓示の精神を実行するための新しいチャンネルなのだとデューイは言うのである。そして、同様のことは、社会的世界についても、制度化した宗教の手を離れて、人間自身の知性の働きによって、つまり科学によって果たされなければならないとデューイは考えるのである。人々の社会的諸関係の背後にあってそれを統括している真理は、社会的諸関係のうちで営まれる個々の人間の活動（実際生活）を通して、その中に自らを不断に顕現する。「人間の活動は、人間が真理を受け取り、真理をわがものとするための器官である。」⁴¹⁾ 真理としての神は、人々の社会生活の中で、不断に自らを啓示している。そして、社会的世界に内在する真理を、人々が各々自らの活動を通して受け取り、それを共通の所有とすると、人々は精神的に一体となり、人間の兄弟愛、つまりイエスが「神の王国」と呼んだ人間共同体が実現される。デューイはそれを「真理の共同体」「真理のコモンウェルス」としての「民主主義」の達成に見るのである。かくして、デューイにおいては、真理の啓示としてのキリスト教の精神は、真理の発見を通して達成される人間共同体というものに見出される。それは、社会的諸関係のうちに内在する真理を、人々が自らの活動を通して認識し、そうした真理の認識に基づいて人々が一個の有機的に組織された精神的共同体を構成するということに他ならない。

以上のようなキリスト教解釈は、1894年3月に「再構成」と題して、学生キリスト者協会で行われたデューイのミシガン大学での最後の講演でも繰り返されている。ここでも彼は、キリスト教が表明する重要な思想として「神の王国」の思想を取り上げ、それを「共通の化身した生命」（the common incarnate Life）の概念、あるいは「全ての人々を活気づけ、彼らを共感と行動の一個の調和ある全体へと結合する目的と利害の概念」⁴²⁾と説明している。つまり、「神の王国」とは、人間相互の関係が共通目的のもとに統一され、人間共同体が一個の有機的生命体のように組織されて、人々の間に生活の統一と真の人間関係、すなわち人類の兄弟愛が実現された状態を言うわけである。こうした「神の王国」の理想は、歴史的現実の中では当初、「教会と呼ばれる特別な組織の形態」ととって実現されたとデューイは言う。つまり、教会組織は、真の人間共同体のあるべき姿、人類の兄弟愛の理想を、人類の歴史において初めて具体的に目に見える形で示したものであったというわけである。だが、「科学的ならびに地理的な諸発見、交易の発展」によって、人々の中の生活と利害の統一は、単に教会組織という限られた範囲で細々と実現されるものではなく、今や地球規模で「生活の実際的事実」となったとデューイは言う。それゆえに、教会組織は真理と精神生活に対する独占権を放棄して、今や現実には人々を一個の人間共同体へと組織するようになっている諸力（政治的、家庭的、産業的諸制度）と協同して、「神の王国」の実現に努めるよう自らを再構成（reconstruct）しなければならないとデューイは言う。

「教会は、もはや地上の正義と善意志を代表する唯一の、あるいは傑出したものと主張することはできない。……それが代表していた理想は、今や生活のありふれた事実となった。その結果、教会の現在の義務は、社会生活の様々な諸力の一つとして位置を占め、共通目的の促進の

ために同等の基礎に基づいて、それら諸力と協同することである。』⁴³⁾

こうした教会の再構成の主張は、この当時のアメリカで盛んになった社会福音運動 (social gospel movement) の考え方にほとんど一致するものと見なすことができよう。もちろん、デューイが社会福音運動に直接関係したということはなかった。だが、ミシガン後期に展開されたデューイのキリスト教解釈からは、キリスト教信仰をそれ自体として保持するのではなく、キリスト教信仰を社会的現実世界の文脈の中に実践的に意味づけようとする彼の姿勢を明らかに読み取ることができるのである。

このような実践志向的な観点から、デューイはキリスト教が示したもう一つの偉大な思想、すなわち「人間への絶体的真理の啓示」という思想を、現実の科学の発展に照らして再構成する必要を述べている。ここでデューイは、キリスト教が求める「絶対的真理」とは、人々の日常の活動を導く「生きた統制力のある真理」(living and controlling truth), 「至高の統制的真理」(supreme controlling truth) であって、宗教的と呼ばれる特定の行動様式を求めるような、いわゆる宗教的真理ではないと述べている。しかるに、歴史の当初においては、真理を探究しテストする方法が微弱で不十分であったので、人々の日常の活動を導く真理は、生活過程そのものを通して人間が自ら探究し発見する生きた生活の真理としてではなく、教会組織の権威によって一度限り固定された超経験的な真理として、いわゆる啓示や靈感という非日常的な媒体を通じて人間に付与されるものだというふうに考えられた。だが、デューイによれば、科学の発展によって、人間は自らの認識能力によって真理に到達する可能性を切り開いた。ここでデューイは、科学の発展を、個々の研究成果においてではなく、「方法における態度の変化」として受けとめ、評価している。つまり、科学は、人間が自らの生活過程にねざして、そこに内在する真理を自ら発見する「探究の方法」であり、「組織された総合的、漸進的、自己証明的な研究のシステム」であって、それによって人間は「真理に到達する人間精神 (human mind) の可能性へのほとんど無限の自信」を手にすることができるようになったというわけである。それゆえに、伝統的なキリスト教の啓示の概念は、新たに科学によって切り開かれた「真理と人間行動との具体的な関係」を踏まえて、根本的に再構成されなければならないとデューイは言う。⁴⁴⁾

「聖書の記述に関する議論、信仰箇条の本義と権威に関する議論は、単にあれこれの科学の成長からやってきたのではない。それは、単に歴史学と天文学を創造説と調和させたり、あるいは歴史と哲学の研究を『歴代誌』や『イザヤ書』と調停させたりするといった問題ではない。再構成はもっとはるかに深い問題である。……われわれは、科学がいかに完全に、人間行動への真理の具体的な関係の概念を変えたかを認識しなければならない。教会は啓示と靈感についての自らの教義を再構成する必要がある、個人は精神的真理とは何かということについての彼らの概念、およびそれが彼に対してもつ権威の本性を、彼自身の宗教生活の内部において、再構成する必要がある。なぜならば、今や科学は真理の方法を代表し、われわれが発見しうるかぎりにおいて、科学にはどんな制限も加えることができないからである。科学は、人間経験におけ

る真理の現実的な化身（incarnation）をリアルな事実として示し、真理の化身をますますリアルなものにしようとしている。」⁴⁵⁾

このようにデューイは、科学の発展を全面的に受け入れたうえで、伝統的な宗教教義を科学の発展という現実に適応するように再解釈することを主張する。もちろん、それはキリスト教信仰の放棄を意味するものではなく、科学を探究の方法として実生活の中に生かしていく態度そのものを、デューイは現代における真の信仰生活と考えているのであり、それが彼の言うキリスト教の再構成ということに他ならない。「再構成」の講演の前年、1893年1月に、やはり学生キリスト者協会で行った「哲学と神学の関係」と題する講演で、彼は「教会の機能はそれ自身を普遍化して、教会の存在を無用にすることである」と述べている。⁴⁶⁾ それは、組織宗教からの彼自身の決別の表明であると同時に、キリスト教信仰はもはや単なる宗教的というラベルを貼られた信仰生活の狭い枠を脱して、人間の具体的な実生活そのものの中で、その実践的な指導力を発揮するものとならなければならないということであろう。同じく、1893年の講演で、デューイは「人間の神への関係は、彼が彼の生活を可能なかぎり最も真剣かつ熱心に受け取る時の、生活に対する彼の関係である」と述べ、祈りとは何かという学生の質問に「祈りとは科学の探究である」と答えている。⁴⁷⁾ それは、人々がまさに科学の方法を身につけ、それによって自ら「生活の真理」を発見していく、そのような探究的な生活者の態度を、現代におけるキリスト教信仰の真の姿として求めるものであろう。

註

- 1) J. Dewey, "From Absolutism to Experimentalism," in *Contemporary American Philosophy* vol. II, ed. by G. P. Adams and W. P. Montague (New York: Macmillan Company, 1930), p. 19.
- 2) 学生時代にデューイは、少なくともトマス・ヘンリー・ハクスリー、オーギュスト・コント、およびハーバード・スペンサーの思想に関心を示した。ハクスリーとコントについては、"From Absolutism to Experimentalism," で、デューイ自身が論及しており (idid., pp. 13, 20.), スペンサーについては、ルイス・フォイヤーの調査によれば、デューイが学生時代に大学図書館から借り出した文献のうち、哲学関係ではスペンサーのものが群を抜いていたということである。See, Lewis S. Feuer, "John Dewey's Reading at College," in *Journal of the History of Ideas*, vol. 19, 1958, pp. 416-20.
- 3) 以上の点について詳細は、拙稿「デューイ教育哲学の形成と原理(1)——信仰と学問をめぐって——」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第32巻, 1986年3月, pp. 35-36, を参照。
- 4) デューイの神秘的体験については、Max Eastman, "John Dewey," in *The Atlantic Monthly* 168 (1941) p. 673, を参照。
- 5) 以上の点について詳細は、前掲拙稿, p. 37, を参照。
- 6) Moton G. White, *Origines of Dewey's Instrumentalism* (New York: Octagon Books, 1964), p. 99.
- 7) ウィリンダ・サヴィッジは、ミシガン時代のデューイの足跡を詳細な資料であとづけた研究の中で、ミシガン時代におけるデューイの宗教関係の講義および講演として、以下のものがあつたと紹介している。See, Willinda Savage, "The Evolution of John Dewey's Philosophy of Experimentalism as Developed at the University of Michigan," Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Michigan, 1950, pp. 132-136.

①学生キリスト者協会 (Students' Christian Association of the University of Michigan) のバイブル・

クラスの講師として指導したもの

- ・ “the life of Christ, with special reference to its importance as an historical events” [*Monthly Bulletin*, Students' Christian Association, University of Michigan, November 1884, pp. 20-21, にこのバイブル・クラスへの参加を呼びかける記事がある。]
- ・ “Church History” [*Ibid.*, November 1887, p. 24, 同上]
- ・ “Philosophic Study of Paul's Epistles” [S. C. A. (*Student's Christian Association*) *Handbooks*, University of Michigan, 1892, p. 19.]
- ・ “Early Development of Christian Doctrine” [10回連続講義, *Ibid.*, 1893, p. 20.]

②学生キリスト者協会主催の日曜集会での講義

- ・ “The Search for God” [*The Ann Arbor Courier*, November 26, 1884, に紹介記事があるのみ]
- ・ “The Obligation to Knowledge of God” [*Monthly Bulletin*, Students' Christian Association, University of Michigan, VI (Nov. 1884) pp. 23-25. これは, *Early Works of John Dewey*, vol. 1, pp. 61-63, に多分, 講義内容の要約の形であろうが, 所収されている。]
- ・ “The Place of Religious Emotion” [*Monthly Bulletin*, op. cit. VIII (Nov. 1886) pp. 23-25. 同じく, *Early Works of John Dewey*, vol. 1, pp. 90-92, に内容の要約が所収されている。]
- ・ “The Motives of the Christian Life” [*Monthly Bulletin*, op. cit., IX (Nov. 1887) p. 47. 内容は不詳]
- ・ “The Social Nature of Christianity” [*Ibid.*, Supplement (Feb. 1887) 内容は不詳]
- ・ “Christ and Life” [*The Michigan Argonaut*, June 16, 1888. 内容は不詳]
- ・ “Christianity and Democracy” [An Address delivered at the Sunday Services of the Students' Christian Association, University of Michigan, 27 March 1892. Published in *Religious Thought at the University of Michigan* (Ann Arbor: Register Publishing Co., Inland Press 1893) pp. 60-69. これは, *Early Works of John Dewey*, vol. 4, pp. 3-10, に所収されている。]
- ・ “Reconstruction” [An Address before the Students' Association of the University of Michigan, 27 May 1894. Published in *Monthly Bulletin*, XV (June. 1894) pp. 149-56. これは, *Early Works* vol. 4, pp. 96-105, に所収されている。]

ジョージ・ダイキューゼンは、この他に、バイブル・クラスでデューイが指導した学習題目として、“Ancient Life and Thought in Its Relation to Christianity” [*Michigan Argonaut*, March 1890, p. 127. 内容は不詳], さらに日曜集会で行った講義として, “Faith and Doubt” [*Monthly Bulletin*, January 1886, p. 56. 内容は不詳] および “The Significance of the Parables” [F. A. Manny, “The Bible Institute,” *Monthly Bulletin*, Nov. 1892, p. 45. 内容は不詳] があったことを指摘している。See, George Dykhuizen, *Life and Mind of John Dewey* (Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press, 1973) pp. 73, 50, 65.

- 8) J. Dewey, “Obligation to Knowledge of God,” in *Early Works* vol. 1, p. 61.
 - 9) J. Dewey, “From Absolutism to Experimentalism,” in op. cit. p. 19.
 - 10) J. Dewey, “Obligation,” *Early Works* 1, p. 61.
 - 11) *Ibid.*, p. 62.
 - 12) *Ibid.*, p. 62.
 - 13) *Ibid.*, p. 62.
 - 14) *Ibid.*, pp. 62, 62-63.
 - 15) *Selections From the Writings of George MacDonald: or Helps for Weary Souls*. Compiled by John Dewey (New York: Thomas R. Knox & Co., 1885)
- デューイによるこの本の出版については, Willinda Savage, op. cit., pp. 179-81, および John Blewett, “Democracy as Religion: Unity in Human Relations,” in John Blewett ed., *John Dewey: His Thought and Influence* (New York: Fordham University Press, 1960) pp. 40-41, 参照。
- 16) *Selections From the Writings of George MacDonald*, p. 69. Cited from Willinda Savage, op. cit., p. 180.

- 17) J. Dewey, "The Place of Religious Emotion," *Early Works* 1, p. 90.
- 18) Ibid., p. 91—92.
- 19) J. Dewey, "Christianity and Democracy," *Early Works* 4, p. 3.
- 20) Ibid., p. 4.
- 21) Ibid., pp. 6—7.
- 22) Ibid., p. 5.
- 23) Ibid., p. 4.
- 24) Ibid., p. 5.
- 25) Ibid., pp. 5, 6.
- 26) Ibid., p. 7.
- 27) Ibid., p. 6.
- 28) Ibid., p. 7.
- 29) Ibid., p. 7.
- 30) Ibid., p. 7.
- 31) Ibid., p. 7.
- 32) Ibid., p. 7.
- 33) Ibid., p. 9.
- 34) Ibid., p. 8.
- 35) Ibid., p. 9.
- 36) Ibid., p. 6.
- 37) Ibid., p. 8.
- 38) Ibid., p. 9.
- 39) Ibid., p. 8.
- 40) Ibid., pp. 8, 8—9.
- 41) Ibid., p. 7.
- 42) J. Dewey, "Reconstruction," *Early Works* 4, p. 100.
- 43) Ibid., p. 101.
- 44) Ibid., pp. 101—02.
- 45) Ibid., p. 103.
- 42) J. Dewey, "The Relation of Philosophy to Theology," *Early Works* 4, p. 367.
- 47) Ibid., p. 367, 368.